
好きに生きてもいいじゃない

ロヒット・マリモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きに生きてもいいじゃない

【Nコード】

N7793X

【作者名】

ロヒシト・マリモ

【あらすじ】

お気楽に好き放題やる正体不明の謎の人の話し、とりあえず世界征服を考えてみた、うん、かつこいい（／＼／＼）自分勝手な主人公です

基本主要人物はネジが飛んでる人が多いです。

さてさてどうしようか？（前書き）

好き放題やる人を書いてみたくなりました！

さてさてどうしようか？

ジリリリリリ！

オ、オー！流石は大手の銀行、大音量ですね（σ・・）σ
お！？あれは僕の好奇心をくすぶる形デース。

ふんふん、オリヤ！

「ゴロゴロ」「バキヤ！」

やはり僕の好奇心に勝てるモノなし！

ふはははは！

ドタドタドタ。

「……！……そこまで！」

おっとっと、来ちゃったか、

怪盗オレ見参！

「……捕らえる！」

あれれ、ちよつとちよつとリアクションが無くないかい

まあいいや、怪盗即ち紳士、それを究極まで極めるとなんと変態になるのだ！

「……！……化けモノか！？」

全く、人がせつかく紳士とは何かをヒモ解いていた所なのに最後まで聴いてくれたのは一人だけって……ギャラリって必要だと思っただよね、オオー！閃いたぞ、この転がってる奴らをギャラリにしちゃおう！

ほほいのホーイ

「！……」

うわゝ迫力あるなゝ流石は国兵。

ゴホン、さてさてギャラリーの準備も整ったし、これはあれですね、決めゼリフみたいなモノを言ってかつこよく去っていく場面ですね！？

「……」

あれは！

ギャラリーの中に一名完全に燃え尽きてる人がいるじゃあーりませんかゝ

君はまだ終わってない！さあ燃えあがれ！

「……！？ガ、アアアああ」

オオ、イエー！

熱狂的なファンに大変身だ！、体が燃える程の思い、確かに受け取った（……）

それではさらばだ！

名乗っておこうと思った（前書き）

システムがまだよく分からない（＋
－
＋）

名乗っておこうと思った

建物から出ようと思った所で思いだした
大事なことを忘れる所だった（「」）
やっぱり名前を残さないとね

うーん、何にしようかな

ポン！

閃いたぞ、やっぱりイニシャルってかっこいいよね！

おっとっと、考えてたら外に出ちゃった

でも、外からの方がでかく描けるからまあいいや（〃＾　＾〃）
よいしょー

ちょっとはみ出しちゃった、でも、僕の情熱はこんな所には収まりきらないって証明したいでかっこいい！（／／　／／）

…ハ！！あまりの出来栄に見とれてしまった？（□）

さーてと、旅立つモノは手に入っただし！僕の夜はこれから始まるのさ！（b^_^。）

変わる世界（前書き）

不定期です、投稿不定期です

変わる世界

* * *

今日はとっても気持ちがいい！

だって昨日の夜、彼からのプロポーズを受けたんだから♪

いつもよりも弾んだ気持ちで私は自分の指に嵌った指輪をおもわず
顔がニヤニヤしながら眺めていた

「お！？今日はご機嫌だね〜」

声のした自分の前に意識を向けると

黒色の長くもないが短くもない髪はボサボサで寝癖のような髪型を
して、顔にはサングラスとマスクをして、薄茶色のロングコートを
きた年齢不詳の男が

窓口の対面に座り、腕を組んでいた。

見るからにただの変質者にしか見えない男だが、私は不機嫌を露わ
にしながら目の前の男を睨んだ

「そんなに見つめられるとこまっちゃうな〜」（／／／／／）

私が睨んだのをどう解釈したのか、気持ちワルく組んでいた腕で自分を抱きしめてクネクネし始めた

……キモイ。

「死ねキモイ」

あ、ヤベ心の声にプラスで本音を付けてだしちゃった

「グッサー！僕のハートにストライク！キミの瞳にフォーリンラブ！」

何かストライクさせちゃったらしい、そのままアウトになって早く帰れ！

ていうか、ホント帰れ（*´Д、´） 3

話したくないけど、貴重な情報原なので仕方なく話し掛ける

「で？今日はなんなの？」

未だにクネクネしながら男は話しはじめた……メチャクチャ蹴り飛ばしたい。

「キミに、ハア、ハア、そろそろ、ハア、動いて、ハア、ハア、欲しいそうだよ、僕とキミとの距離も、ハア、そろそろ動いて欲しい（照）」

クネクネしながら汗をかいてハアハア、ハアハア、…コイツマジ死

ね！

「グッハアゝ（嬉）」

思わず立ち上がって蹴り飛ばしてしまった（爽快）
蹴った相手がニヤついていたのは……

… 追撃をかけようか。

「… 了解したわ…」

「ハアハア（ノノノノ）」

僕とキミとの仲も了解だよ（*）ゝ」

… この変態ゴミは… 焼却してやろうと思ったら消えやがった
それと一緒に周りが動き出す

「先輩どうしたんですか？」

隣の窓口に目をやれば、若干怯えた後輩の女の子が顔をひきつらせていた

「なんでもないわ」

満面の笑みを見せて早々に会話を終わらせた

もつそろそろ幕が上がるって事なのかしらね

「ジリリリリ！」

非常用ベルが館内に響き渡った

周りは若干の混乱はあるものの落ち着いているようだ
ドタドタと、この建物に併設してある国兵詰め所から武装した人達
が走って行くのが窓口から見えた

「先輩、何か嫌な予感がするんですが…」

あんた居たのかよ！嫌な予感してるなら先ず窓口から離れるよ！
他の奴らは私らみたいに座ってすらいらないからね！
せめて立つところよ！

「あつちは金庫ですよ、泥棒でも入ったんでしょうか？」

一通り隣りの娘にツツコンで遊んでた（心の中で）…さあね、ま、
どうでもいいけどね。

国兵の皆さんが行って少し後、銃撃音や叫び声が響いてきた
それを聞いて周りはパニックになり建物から慌てて飛び出していく
…チラッ、と、隣りを見る…流石にいないか、これで居たらネジが

数本飛んでるか、只の馬鹿だろう…私は馬鹿じゃないよ…

私は誰も居なくなっただけで周りを気にする必要がなくなったのでとりあえず窓口に足を組んで乗せてみた…何かスツキリする

その体勢のままマツタリとしていると、

私の目の前をうんうん唸りながら大き過ぎるマントを引きつった黒髪の少年が出口に向かって歩いて行く

…何なんだコイツは…このちんちくりん、凄まじい血の臭いがしやる、こっちには気付いてないみたいだが…

少年を観察しているとそのまま出口のガラス張りの扉を開けて外に出て行った…数歩歩いた所で何か閃いたのかしきりに頷いている

…コイツ空飛びやがった、数秒後、私の居る建物が何度も凄まじい衝撃を受けているようだった、天井の照明器具や時には天井その物が降ってきていた

私も存外、狂っているんでしょね

これからが楽しみで仕方無い♪

それじゃ、あの人の指示だし私も動き出そうかな

彼女は指に嵌めていた指輪を外すとその場から姿を消した

遊びに出掛けたら楽しかった！（前書き）

俺オレ視点です、

どうしても短くなるな f ^
| ^
;

遊びに出掛けたら楽しかった！

ルンルン、ルンルン、

大きな道はやっぱ真ん中を歩きたいよね。(^ ^)。

いろんな物が置いてあつて障害物走みたいで結構楽しい！

しかも！時々いろんな物が僕の道に置いてあるんだ！

ヤッホーイ！

ボギヤ、ゴシヤ！ゴロ、グシヤ

大きな道つて楽しい事がいっぱいだね！

あれは！？、ま、まさか、ロボットだと！？

おっほっほっほ(^O^)

こんな好奇心を誘う物が道端に落ちてるなんて！
拾っても問題ないよね？

だってロボットから僕に熱烈なアタックがきてるし

その思いを無碍にするのは、僕には出来ない！！

トウ！

熱烈なアタック、確かに受け取った！

とりあえずポケットにしまっておこ（喜）

おっと！そうだった！僕は怪盗でした（／　＾＾　／

よし！変身！

こんな感じがな、さてっと、そろそろ帰ろうかな、玩具も手に入ったしね、
ばいばい

遊びに出掛けたら楽しかった！（後書き）

ヒロイン？が、登場するかも？

壊された日常（前書き）

書くのが楽しくなってきた

壊された日常

* * *

通報があつたのはほんの数十分前だ。

この国最大の銀行からの出勤依頼がきた

正確にはそこに兵を派遣していた国营警察からの要請だ

あそこは安全性を考えて国に多額の寄付をし、国運営の「警察」、一般では「国兵」と言われる兵士が駐屯しているはず、と言っても配備される人員は其処まで屈強とは言えない者達だが

その代わり規律が厳しく統制がとれている

現在では数多くの女性が国营警察の重要な役職についていると聞く

ハッキリ言つて羨ましい！

こんなムサイ奴らしかいない所になんて居たくない！

「真剣な顔して、そんなに気張らなくても大丈夫さ、だって僕が居るんだ・か・ら（＾－＾）」

… ひねり潰してゝ！その無駄過ぎる整った顔をこつ、グシャつと。

「グシャ！？」

あ、潰れた（♪）

一気に車内が静かになった。

手に汚い物が付いたから伸びてる奴の服にこすりつけといた

ちょうど車が止まり運転席と後ろのトレーラーを繋ぐ扉が開いて社長が入ってきた

「まあ、お前らの仕事は決まっている訳だが、とりあえず適当に死なない程度に頑張ろう」

… 小さくガッツポーズを決める小柄な… いや我らがチビガキ社長がいた

「情報だと単独犯って事らしい、ただ、単独で国兵50人を殺し、銀行を半壊させる程の規格外って事だけど」

… 面白いじゃん

こんなムサイ所にて、鬱憤が溜まってた所だったし、規格外が相手なら武装は自由、リミッターも外せる！

これほど嬉しい事はない！

「この優雅な僕にはふさわしい相手だね（´・ー・｀）」

復活しやがったか。

「ぐふ、酷いじゃないか…」

こちらに目線をチラチラ送って来るのでちょうどいいから武器の試し撃ちの的にした（スッキリ）

「はい、ふざけるのはその位にして、配置に着いちゃってー」

スッキリしたし、後はメインディッシュを頂こうと（ワクワク）

* * *

周りには残骸や死体が転がっている。

俺ら以外にも招集された会社があつたようだけど、軽々と弾き飛ばされたり退却したりと結局の所、なすすべなくやられている状況だ

「こりゃ、不味いかな（苦）」

うちの社員はたった2人、だが2人共規格外認定をされた、言うなれば化け物だ

規格外には規格外しかないよねって思ったんだけど

視線を前に向ければいったい何回死んで居るのか、何度も体を吹き飛ばされながらも喜々として飛びかかっている男。

その男の顔は歪な笑顔を貼り付けていた
脇を見れば少し離れた所に体の何倍もある大型銃火器を派手にぶっ放している見目麗しい女

彼女はもう一人の男に当たる事などお構いなしに砲撃している

彼女の顔は…酷く険しい顔をしている。

…いや、何かイライラしているのか？、な、どっちにしろこのままじゃジリ貧だ。

視線を敵に向ける、見た目はただのその辺の子供だ、規格外2人の猛攻を受けても足止めどころか進む方向すら変えられていない状況を見ていなければだが

ゴシャン！

あゝ、キレちゃったかなゝ、危ないから離れよ。

女の方をチラッと横目で見たら完全装甲機動兵器、あゝまゝ見た目
二足歩行ロボットなんだけど

体中の銃火器を一斉に子供に向けてぶっ放し始めた

銃撃と言うより爆撃だな。∴俺の居た所も爆撃されてた。

俺、君達の社長だよ（。°。；）

しばらく爆撃を眺めてたら何かが爆撃に巻き込まれながらこちらに
近寄って来た

∴ホントに気持ち悪いなコイツ。

「コホ、コホ、僕のエレガントボディー、エクセレント」

∴何しに来たんだ。コホ、コホの部分で尋常じゃない血を吐血して
るし

「僕のエレガント・アイは美しい物しか見えないのさ
ぐ（´ー、）」

…あゝ、爆煙で見えないからこっちに来たのね。

「社っ長さんは僕のエレガント・アイなら見えるから大丈夫ですよ
（キラ）」

…こいつ遠回しにチビって言いたいんだろ（-.-*）

ていうか近づくな！血だらけで内蔵とか零れ出しながらウインクし
てもキモいだけだ！

エレガントを連呼しながら吐血する汚い奴は無視して、爆心地に目
を向けた。

未だに凄まじい爆発が起こっている

…いつまで彼女は撃つつもりなんだ。

ふっと、爆撃が止んだ。やっと満足したのか。

グワン！

女の方を見たら二足口ボが空中で何かに締め付けられて浮いていた

爆煙の中から子供が歩いて出てきた…傷どころか、服に汚れすら付いていない。

…本物の化け物っていうのはああいう奴をいうんだろうね。

子供は宙に浮いたロボに近寄り、それを掴んだ所で短パンのポケットにロボが吸い込まれていった。

…大事な社員が。

社長としては責任があるし、少ない社員を手放したくないんだけど！

「彼女をお持ち帰りなんて、羨ましい事させませんよ！」

隣りを見てみたらそこにはキモエレガントは居なかった。

あの化け物に特攻していた…正面からじゃ、ありや無理だな化け物の臭いは把握出来たし、恐らく彼女はまだ死んだ訳ではないだろうしな。

ここは、動かない方が良さそうだな。

子供は変なポーズを取ってピカピカ光ながら消えていった。

「お持ち帰りされた」 m (T | T) m 「

…変態キモ男の嘆きだけが虚しく響いてきた

壊された日常（後書き）

細かい説明などはほとんどしません。

細かい説明を入れると書きにくいです

（苦汗）

こっちの方がサクサク書けるのでこのまま突き進みます。

マイ・ハウス・リターン（ ）（前書き）

この視点、書きやすいんだけど、長く書けない

マイ・ハウス・リターン（ ）ゞ

とーちやーく！

やっぱり我が家が一番だね！（ ）

僕のお気に入りにダイブ！

ふにゅふにゅ。

このモフモフが堪らない！

モゾモゾ。

もゝ、駄目だよ動いちゃ。

ドゴォ！

ふいゝ（ゝ、ゝ）
フカフカゝ

……ハ！、まだ夜を満喫していないじゃないか！

立ち上がれ！僕！

（　○　）

うおりゃー！

……

でも、眠い（＋　｜　＋）

キミはまだまだやれる子だ！

そうか！このモフモフがいけないんだ！

僕を魅力的な国に誘おうとするなんて、

ふ、なかなかやるな

」（　ゝ　ー　、　）

だが負けない！敵が強大ならば僕にだって奥の手があるんだ！

くらえ！今日集めた宝物を数えて気を紛らわせよう作戦！

宝物が一つ……宝物が二つ……宝物が三つ……

マイ・ハウス・リターン（ ）ゞ（後書き）

設定の説明や世界観など、ほとんど説明しませんが、実はちゃんと有ります。

…書きませんが。書くとなんかしくなりそうなので
（^ー^；）

化け物の巣窟（前書き）

自由過ぎる主人公。

これが一番大事で大好きです♪

化け物の巣窟

* * *

.....。

あのガキに不思議な空間に閉じ込められてからしばらくして、何もない暗い空間に光が入ってきた。

何もする事がなく暇をしていたから、ちょっと行ってみるか、光が差し込んで来る方に向かったら

ぽん。

…意外に簡単に外に出た。そして目の前にぐっすり眠るクソガキと私の何倍もあるモンスターと言っていい、犬の化け物が奴の前で大口を開けていた。

…ちょっと待て。このコースは私も食べられるんじゃないか？

いくら装甲を装備しているといっても噛まれるのは傷つく（心が）

そつとクソガキを差し出した。

どうやら狙いはこのクソガキのようで

「お前も同士だったか」

と、一瞬で熱い友情を築いた。

…喋れるのか。

…可愛い奴め♪

忌々しいクソガキをこの手で葬ってやりたかったが、何が出るか分からないクソガキを刺激したくはない。

…このワンコーを生け贄…イヤ、可愛いワンコーがやってくれるって言ってるんだ、ここは広い心で看取ってやるべきだろう。

少し離れた所で見守る事にした。でっかいワンコーは私が離れるまで口を開けたままジッとしていた

手でどうぞ、と合図を送ったらそのまま勢い良くかじりついた。

その瞬間デカ犬の頭が弾け飛んだ。

…何もしなくて良かった。

「ふっかーっ！（＾Ｏ＾）」

血しぶきの中から無駄に元気なクソガキが飛び上がって出てきた。

血しぶきから出てきた筈が汚れていない。

このまま正面から殺りあっても、さっきの二の舞だしな。
デカ犬も役に立たないし。

「眠気もスツキリ！」

心もピカピカ 今日僕もスーパーマン！」

いきなりよく分からない動きをしながらクソガキが喋りだし、そのまま決めポーズをとった。

クソガキはポーズを決めたまましばらく動かなかったが、私に気付いて目を輝かせていた。

「ロボ…カッコ良すぎる！」

ウキヤウキヤいいながら私の周りを回ったりペチペチ叩きながら騒ぎ始めた。

ジッとしていれば害が無さそうなので今は大人しくしていよう。

しばらくクソガキはウキヤウキヤはしゃいでいた。

はしゃぎながらフラフラし始めた？変な踊りを踊り始めたと思ったら床に倒れて眠り始めた。

… いったい何だったんだ。

余りにも自由し過ぎる理解し難いクソガキの寝顔は良く見ると年相応に無邪気に可愛いらしくみえた。

化け物の巣窟（後書き）

思ったらまだ誰一人名前を出して居ませんでした。

後で考えようとし過ぎました。

そろそろ名前を決めて書いていこうと思います。

余り名前は使いたくないので多様はしませんが。

化け物の巣窟 プラス (前書き)

基本主要人物はネジが数本飛んでいます。

化け物の巣窟 プラス

* * *

近くで転がっているガキが完全に眠ったのを確認して、コイツから距離をとる。

どうにかしてコイツをやれないだろうか？

見た目はその辺の子供だし、殺せないモノなどこの世に存在するとは私には思えない。

自分の手持ちの武器では歯が立たなかったのは事実だが、もしかしたら今なら殺れるんじゃないか？

試してみたい。しかし、さっきのバカ犬の二の舞になりかねない。

「同士よ、なにを悩んでいる？」

ん？誰だこの女？

私より身長が少し小さい黒髪の女が話し掛けてきていた。

…バカ犬、か？何だろうとちょうどいいのが現れてくれた。

「またしても奴に殺られてしもうた、今の我では牙も爪もない…何と口惜しい、奴が寝ている今こそ絶好の好機というに」

勝手に語りだし一人悔しがってる

絶好の好機に攻撃をさっしにかけていなかったか？

やはりバカ犬だな。

「同士なら困っている時は助け合うものだ。これを使うといい。」

バカ女にとりあえず携帯折りたたみ式振動刀を差し出した。

「助かる、やはり同士は困っている時は助け合わないとな！」

やけに嬉しそうに武器を受け取ったバカ女に簡単に使い方を教えて送り出した。

まず、あんな物で殺せるとは思っていないが。
バカ女がどういった生き物かにも興味があつたから実験してみたくなつた。

バカ女（犬）はクソガキにゆっくりと近づき外さない距離まで近くと渡した武器をガキに振り下ろした。

ブン。

…バカ犬が武器を振り下ろした姿勢のまま固まっている。

近寄りたくないの観ていると、バカ女の体が右肩から反対の腰に向かった斜めに切れ目が入り、そこから上がスライドして崩れ落ちた。

チ、使えねーな、やっぱりクズ犬だな。接近戦では駄目か。

今だにクソガキはスヤスヤ涎を垂らして眠っている。

「…同士よ、すまない、しくじった。」

気付いたら直ぐとなりになさきより体の大きさが縮んだグズ女がすまなさそうにしていた。

「失敗は誰にでもある事だから、気にするな。」

「く、同士よ、感謝する」

何か心を打たれたような顔をしているバカ犬。

これで繰り返し使える捨て駒が入った。

何回か同じようにバカ駒にタイプが違う武器を持たせて特攻させた。

…ふむふむ、次元干渉形の武器が唯一変化があったな。

どうやらこのガキ、体の皮の上に更に目に見えない何かで全身を覆っているようだ。

「…同士よ、少し休ませてはくれぬか？血を流し過ぎて体がフラついてきた」

顔を青くして手乗りサイズまで小さくなったバカ犬が足をガクガクさせながら何か言ってきている。

…アア！これからだろうが！、そう思ったが、流石に手乗りサイズになったコイツに持たせられる武器はない。

「そうですね、少し休んで下さい」

そしてまた私の手となり足となりボロ雑巾のように働きなさい！

バカ犬（ボロ雑巾）はその場でうずくまり眠ってしまった。

バカ犬が使えないとなると、ガキに攻撃するのは止めておいた方がいいな。

それにしても、この部屋に出口はないようだし、試しにバカ犬に壁に攻撃させてみたが手応えも無かった。

出る手段がない訳ではないが、敵を目の前にして逃げるようで嫌だ。それに少し調子に乗って武器を出し過ぎたから少し疲れた。

こちらから攻撃を仕掛けなければ危険はないようだし、少し私も休もう。

装甲に身を固めたままその場に座り休む事にした。

…見た目ただの木で出来た床なのに何とも眠気を誘う心地よさがあるな。

いつの間にかウトウトと私は眠ってしまった。

化け物の巣窟 プラス (後書き)

結局今回も名前を出せませんでした。

名前は一応決まりました。

多忙

ふう、もうこんな時間か。

机から顔を上げ時計を確認すれば既に夜の2時になっていた

俺、働き過ぎだよなー（「。」「」）

あの子供の化け物との一件から数日経つ、
そこまで広くない部屋の中を見渡せば
誰も座っていない机が2つ。

一人は誘拐？され、一人は行方不明。

もともとまともに仕事をする奴等ではなかったが、いないとなると
部屋が多少広くなったように感じる

あの子供が消えてから嘆いてた変態男は

「…社長さん、しばらく僕、自分磨きの旅に出掛けます。」

そういうと散らばった内臓や体の破片が男に引き寄せられ傷だらけ
だった体が元通りに戻った。

「それでは、失礼しますね。」

そういうと綺麗に一礼してから振り返りピョンピョン建物を飛び越えてどこかへ 行ってしまった。

一人残された俺は、駆けつけた
特兵に経緯と状況を説明してその場を任せた。

はあ（ - 〇 - ） なんてこうも社員共は自由なんだ。

一人とぼとぼと愚痴をこぼしながら歩いてその場を離れた。

因みに乗ってきたトレーラーは連れ去られた彼女が盛大に破壊してくれました。

借り物なんですけどね！（ヤケクソ）

そのせいで現在借り入れ先である企業連盟から賠償の請求と事態の報告、被害状況などを説明せよ。と通達がきている。

頭が痛い…

現場にいた会社は他にも何社があったが自分達の様に戦えた所は他にはなかった。

…俺達も戦えた訳ではないが。

そんな訳で現在俺一人の会社に事態の報告やらそれに対する責任など、

そういった物を提出しろという紙が机に並んでいた訳だ。

これだけならまあ何とかあったが

『カリナファンクラブ』とかいうところからの電話がうつとうしい！

確かに雇った時は凄い美人で、こんな綺麗な人が傭兵企業でやっていけるのか？などと思ったが、いざ戦闘が始まれば大型重火器を派手にぶっ放し、それをかいくぐって来た者がいても凄まじい身体能力で返り討ちにしていた。

見た目は美しいと言ってもいいくらいだが、戦闘での血潮に歓喜するあの姿を見た後では素直に「綺麗な人」などとは思えなく成った、リミッターのせいもあるがああ凶暴な性格で彼女の美しさは全て台無しだ。

今はその彼女の行方の捜査までしている現状だ、まだ8歳の体には結構な負担だ…背が伸びなかったらどうしてくれる！

しかし、俺はやり遂げた。全ての書類を書き終わり、五月蠅い電話の対応も乗り切った。

良くやった俺！頑張った俺！自分を賞賛しながら会社に設置してある冷蔵庫から 瓶の牛乳を取り出して喉をならしながら 一気に飲み干した。

ふう、やはり牛乳だな。さてと、じゃあ彼女を迎えに行つてしばらく俺は休もう。

…休みたいな…休めないだろうな。

ドアの閉まる音が部屋に響き部屋には静けさだけが残った。

多忙（後書き）

ヒロインの名前をビシヨーにのせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7793x/>

好きに生きてもいいじゃない

2011年12月3日02時50分発行